

「特A」奪還へ鼓舞

基本から対策徹底を 土づくりや適期作業



▲30年産での「特A」奪還に向け、意識を高めた生産者大会

4月15日(日)、魚沼米改良協会と魚沼米対策協議会、新潟県は、「魚沼コシヒカリ」が日本穀物検定協会の平成29年産米の食味ランキングで「A」に位置付けられたことを受け、南魚沼市で魚沼米生産者大会を開きました。

魚沼地域7市町の生産者ら650人が参加。30年産での「特A」奪還に向け、意識を高めました。

大会では、良食味米の生産のため、①土づくり②適期田植え③生育診断に基づく施肥④適期収穫と適正な乾燥・調製について技術対策を提起。産地一丸となった取り組みを呼び掛け、「消費者の期待に応える日本一おいしい魚沼コシヒカリを生産し続ける」とした大会宣言を採択しました。

土づくりでは、土壌診断に基づいたケイ酸の施用や作土深15センチの確保を求めました。田植えは、早過ぎても遅過ぎても良くないとし、5月中旬に終わらせるように訴えました。田植えが遅くなる場合や高標高地では中苗・成苗を使う。追肥は、葉緑素計(SPAD)による生育診断に基づいて施用するとし、また、収穫は適期に行い、乾燥・調製

まで丁寧に作業をすました。こうしたポイントは、新潟薬科大学の大坪研一教授らの指摘を踏まえて決定しました。記念講演でも大坪教授は、栽培技術と食味の関係を解説。大規模農家に作期分散による多品種栽培を勧めました。

実需者の、埼玉県川越市の米穀店「金子商店」の金子真人社長が「JA・集荷業者が主体となり、魚沼コシヒカリの変わらぬおいしさを今すぐに発信すべきだ」と提案しました。

参加した生産者からは、結果を受け止めて前向きに栽培に取り組もうという姿勢が見られました。

小千谷市から参加した生産者は「魚沼コシヒカリの評価が『近年下がっているという声もある』と聞いていたので、Aランクになったことを冷静に受け止めた。基本に立ち返ることが重要だ。土づくりを重視したい」と話しました。十日町市から参加した生産者は「乾燥・調製や選別など仕上げまでの作業内容をきっちり見直し、どこにも負けない品質の米を作っていく」と意欲を見せました。